

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に、というニュースを聞いて、世界遺産検定マイスターを目指しておられる友人の喜ぶ顔が目には浮かびました。一度申請が取り下げられたことを知っていましたので、私も「とうとう…」という嬉しい気持ちになりました。世界遺産となれば、家宝のようなものが、世界の宝として保存され、多くの人々が見てみたいと思わずにはいられないでしょう。

「隠れキリシタン」という言葉に慣れていましたが、「潜伏キリシタン」という言葉を私は使ったことがありませんでした。「隠れキリシタン」とは島原の乱後、厳重になった江戸幕府の禁制により、表向きは仏教徒をよそおいながら、1873年禁教の高札が廃されるまで信仰を守り続けてきたキリスト教徒のことです。北九州地方に多く、民俗信仰と混合した特異の礼拝形式や習慣を持っています。その中で、1865年宣教師プティジャンを長崎の大浦天主堂に訪ねてきて、その後、カトリック教会に加わった人々を「潜伏キリシタン」と呼ぶそうです。けれども、長崎県五島列島、生月島などには、なお旧習を守って現在に及んでいる信者がいて、こちらははまだ「隠れキリシタン」と呼ばれ、区別されているとのこと。



私は日本のキリシタンについて歴史の教科書程度の知識しかありませんでした。夫の郷里である国東半島で、ペトロカスイ岐部(1587-1639)の銅像を見て、その生涯を学びました。追放も、弾圧も、敢えて身に引き受けて、信仰に生き、伝道し、ついに殉教したことを知りました。同じような人々が多数いました。どうして、そのような生き方が出来たのか、知りたいと思ったのはごく最近のことです。本を読んだり、資料を見たり、お話を聞いたり、旅行に行っては関係する場所があれば訪ねたりしてきました。本当に悲しい歴史の事実です。同時に信仰を守り、死をも恐れずに生きた人々への尊敬、感動を抱かずにいられません。

キリシタンと言えば、禁教、裏切、密告、追放、迫害、殉教という痛ましい事柄とは切り離せません。『日本キリシタン殉教史』(片岡弥吉著)によれば、磔、斬首、火あぶり、拷問により殉教の死を遂げた人々は3千数百人に及んでいます。1868年から1870年にかけての「浦上四番崩れ(樅拳)」では長崎の浦上で3200余名の村人全員が西日本各地に流刑となり、水責め、雪責め、氷責め、火責め、飢餓拷問、箱詰め、磔、親の前でその子供を拷問する、食事は腐った米、などその過酷さと陰惨さ・残虐さは旧幕時代以上だったと記録されています。4年前、津和野に行った時、その資料を初めて目にしました。

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、原城跡、大浦天主堂、更に禁教期に弾圧を逃れて移り住んだ集落など12の資産で構成され、日本政府が世界文化遺産への登録を目指しています。もちろん復興された美しいカトリック教会堂があります。文化庁は「キリスト教の禁教期に絞るよう指摘を受けて、見直しをした。これらの地域の中には離島や過疎地域もあるため、これを機に、地域振興に役立ててほしい」と話しています。この経過を見ると、ユネスコが「禁教期」の迫害、信仰に関心を寄せているのに対し、日本サイドは観光、振興に期待していることが分かります。

研究資料の閲覧のために4月に長崎歴史文化博物館を訪ねた友人は、長崎では世界遺産に登録されることによって、観光客が増え、経済的に活況となると期待して、地元の人々が沸き立っていた様子を見聞きしてきました。けれども、キリシタンは「負の遺産」であるゆえに、そのような扱われ方には、疑問を感じるとおっしゃっておられました。

密かに守り、伝えられてきた信仰の素晴らしさを伝えるだけでなく、この残酷な過去に、何を学び、どんなメッセージを発信したらいいのかが問われているでしょう。信仰、思想の自由を大切にしたい、異文化を尊重したい、権力による横暴な支配を許さない等々、「負」を解消し、償い、二度と「負」を負わせないという、心のこもった強い愛のメッセージを発信してほしいと思います。